

ほほえみ 第59号



10月になり、秋本番です。ほほえみ読者の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。初夏のころから台風が多くて、秋になっても爆弾低気圧が通過したり、気候変動が大きくなっている気がします。台風も強力なのが多くて、もしかすると地球温暖化の影響なのかとも思います。秋と言えば、我が家では、サンマも何回か食卓に上りましたが、季節の食べ物という感じがして、なかなか良いですね。でも、心なしか、今年のサンマは大きくないような？温暖化の影響でしょうか。

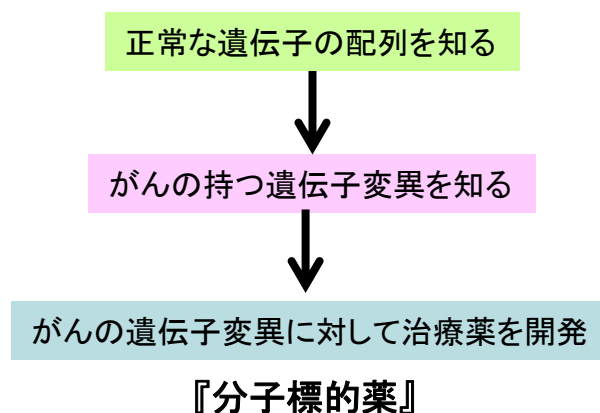
分子生物学

腫瘍内科医は、化学療法を行うのが専門なのですが、最近は化学療法とは言わないで、「がん薬物療法」という言葉の方が、実情に合っているという風に使われています。従来型の抗がん剤も勿論沢山あるのですが、21世紀になって上梓された薬剤は、圧倒的に分子標的薬となっています。がん化学療法の背景となる科学は、20世紀前半は有機化学、その後、抗生物質の開発や酵素化学となり、20世紀後半から分子生物学が主流となりました。腫瘍内科の領域は、最も生物学の恩恵を、特に分子生物学の恩恵を受けていると言えます。

分子生物学という学問は、生物の営みを種々な分子の機能から読み解く学問ですが、個々の分子は遺伝子産物でもあるので、遺伝子の理解を抜きには語れません。遺伝子の配列が決定されると、正常でない状態は遺伝子変異として理解されるようになります。さらに、変異を人工的に作成して遺伝子機能を調べるというのが分子生物学の有力な手法の一つです。こうして、遺伝子を人工的に改変して機能を調べることが可能になったことの裏返しですが、遺伝子工学(バイオ・テクノロジー)であると言えます。このような科学的な背景をもって、がんという病気を、がんの持つ遺伝子変異と捉え、それを標的とした薬剤を開発するという、より病気の本態に根差した治療戦略が立てられてきたことが、21世紀に急速に治療学の変化として見えて来ています。基礎研究の少し後を、リン種医学が辿っていくというのが医学の姿なのですが、分子生物学の隆盛は明確で、ここ十年ぐらいで明らかに臨床面での応用が進みました。この流れは、背景となる生物学の進歩がすでにあるので、当面、確実でしょう。

ゲノム・プロジェクトでヒトの遺伝子のDNA配列を決定したのは、国家的プロジェクト以上の、国際プロジェクトだったのですが、今やお金を払えば、個人の全DNA配列を短期間で確定できるまでになっています。しかも宇宙旅行は実用化されても何千万円という額ですが、DNA配列を読むのは数十万円のこらしいです。車を買うより安いですね。全ゲノム解析という手法は10年前には考えられませんでした。

現在は遺伝子産物を相手にしていますが、遺伝子そのものを治療する時代がくるかもしれません。アイザック・アシモフが、小説の中で登場人物に言わせたように、遺伝子の綺麗さを誇る時代が来るのかもしれません。



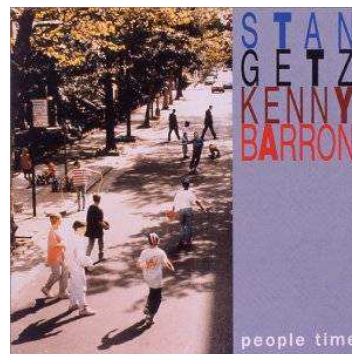
スタン・ゲッツのピープル・タイム

先日、古いステレオ、レコード、CD、レーザー・ディスクなどを整理していて、たまたま聴き返していたのが、このアルバムです。スタン・ゲッツは白人のテナー・サクソ奏者ですが、クール・サウンドが持ち味とされている人です。代表作とされるのは「スイート・レイン」や「ゲッツ・ジルベルト(ボサノバ)」です。これらのCDを実際に持っている方は少ないかもしれませんが、雰囲気の良い音楽なので、喫茶店やレストランに、BGMとして、よくかかっていますね。誰もが聴いたことがある音楽だろうと思います。カクテルやウイスキーを飲むのに良い感じ。

「ピープル・タイム」のCDも持ってはいまし、同じころに録画されたレーザー・ディスクも持っているのですが、かつては繰り返し聞いたはずですが、十年以上あけて聞いてみると、テナーの音が凄まじく、圧倒されました。これ以上強く吹くと、音が割れるあたりまで吹いているのですが、全く迷いが無い演奏なのです。

サクソスは、演奏者が変わると人の声のように音色が変わる楽器なのですが、この音色は独自の世界ですし、彼のキャリアの中でも、特異な音だろうと思います。この作品は彼の遺作で、ピアノでデュオを務めたケニー・バロンが、ゲッツは曲の合間に肩で息をしていた・・・と言っているの、命を振り絞るような演奏であったろうと思います。ケニー・バロンのピアノも、洗練されていて素晴らしいです。

そして、ライブ録音なのですね。聴衆の拍手、お店のざわめきも伝わってきて、まあ、すごいCDです。



新渡戸菊

先日、岩手・沖縄かけはし交流協会の工藤様から、新渡戸菊キックオフシンポジウムのご案内をいただきました。新渡戸菊の薬理効果を研究する会を立ち上げるという趣旨とのことで、東京でシンポジウムを行うということでした。

工藤様が盛岡で新渡戸菊の栽培にも尽力されていることは以前に伺っていましたが、新渡戸稲造会の内川先生が、かねてから活動されてきた内容が結実することになったのです。新渡戸菊は、新渡戸稲造が台湾で見つけた植物で、暖かくないと花を咲かせないようですが、この菊の名前を通して、新渡戸稲造が、日本初の農学博士であったことがわかりますね。



ニトベギク Wikipediaより引用

MEMO

10月のがん化学療法科の予定

10月9日	柴田教授外来
10月12日	体育の日
10月16日	新渡戸稲造記念メディカル・カフェ(予定)
10月23日	柴田教授外来

